



ゴールデンウィークが明けて二週間が経ちました。再び始まった幼稚園生活。生活リズムが戻るのに時間のかかる子もおりましたが、今では表情や動きにも落ち着きが見られ、いつもの幼稚園生活のリズムに少しずつ溶け込んできました。

つぼみぐみと年少児達も、登園すると自分の靴を靴箱にしまったり、カバンや帽子、水筒を決められた場所に置くなど、自分の身の回りのことを自分でしようとする姿が増えています。こうした毎日の小さな積み重ねが、幼児期に大切な基本的生活習慣の土台です。大人から見れば当たり前のごとも、幼い子ども達にとっては大きな成長の一步です（笑）

生活が安定してくると次に育っていくのが「友達との関わり」です。

つぼみぐみや年少児達は、まだまだ一人遊びが中心ですが、最近では二人、三人で遊ぶ姿も見られるようになってきましたよ。とはいえ、一緒に遊んでいると思ったら、次の瞬間には別の遊びへ… 小さな“渡り鳥”ように興味の向く方へ飛んでいく姿もこの時期らしさです（笑）

まだ、遊び方や上手な伝え方が十分ではないので、トラブルもあります。それも友達と関わる中で学ぶ大切な経験です。名前を覚え、気の合う仲間を見つけて、遊びの幅を広げながら、白ゆりっ子達の世界が豊かに広がっていきます。



### ♪♪♪お知らせ♪♪♪

**5月27日（水）に「内科検診」を行います。**

今年度より「啓明こどもクリニック」の柳先生に子ども達の発育状況をチェックしていただきます。

**この日の降園時間は30分遅れになります。**

**降園バスを利用される方はバス到着時刻を間違えないようにご注意ください。**

**なお、お歩きコースの降園時間は通常通りです。**

春らしい陽気の日が増えてきました。

一方で、朝晩は肌寒く感じる日もあり、登園時と日中の気温差が大きい時期でもあります。

朝は上着が必要なほどでも、活動が盛んになる時間帯にはポカポカと暖かくなり、汗をかきながら遊ぶ子ども達の姿も見られます。

お子さんが園生活の中で快適に過ごせるように衣服の調整にご配慮下さい。

長袖の下に半袖、着脱しやすい上着を着せるなど気温や活動量に応じて調整できる服装にしてあげて下さい。

この時期の子ども達は、夢中で遊ぶうちに思った以上に汗をかくものです。汗が冷えて体調を崩すことがないように、登園時の服装の確認をお願いします。

### 3歳より前の記憶は「何処に？」

「小さい頃に家族で旅行に行ったのに、子どもが全然覚えていない（涙）」 そんな経験をされた保護者の方も少なくないと思います。親にとっては、初めての家族旅行、海で遊んだこと、おじいちゃんやおばあちゃんに抱っこされたこと… etc かけがえのない思い出ですね。それなのに、子ども本人に聞くと「覚えていない…」とあっさり言われてしまう。親としては寂しくがっかりしてしまいますよね（涙）

でも、3歳より前のことを思い出せないことは、決して珍しいことではありませんよ。これは「幼児期健忘」と呼ばれ、正常な発達過程の一つを考えられています。興味深いのは、50歳でも5歳でも、3歳より前のことはほとんど覚えていないという点です。

**3歳より前の子どもには記憶力がないのでしょうか？**

実は“記憶の種類”が関係しているのです。自分が過去に体験した出来事を「いつ、どこで、誰と、何をしたか」と思い出し、言葉にできる記憶を「エピソード記憶」と呼びます。これは、単に何かを覚えていくというだけではなく、過去の自分と今の自分を繋げて理解する力で、それを言葉で表現する力が関わっています。つまり、思い出として語れる記憶には「記憶力」だけでなく「自己認識」「時間の感覚」「言葉の力」が必要だということです。

子どもは2歳頃になると鏡に映った姿を自分だとわかるようになります。「今ここにいる自分」への理解が育ってくるのです。でも、録画された過去の自分を見て「過去の自分と今の自分が繋がっている」と理解できるようになるのは4歳頃からです。もちろん、1歳や2歳の幼児でも、比較的近い過去のことを大人（親）の援助があれば思い出すことはできます。でもその経験を、自分の過去として整理し、言葉で語れるようになるのは3歳から4歳頃に育つ力です。

**大切なのは「大人（親）との会話」です。** 子どもは一人で過去を整理できるようになるわけではありません。経験を共有した大人（親）が「楽しかったね」「綺麗だったね」「あの時、こんな顔をしていたよ」というふうに語りかけることで、子どもは自分の経験を言葉で受け取り直していくのです。つまり、親子で思い出を語り合うことは、子どもが自分の過去を知るための大切な機会なのです。

たとえ子ども自身がその出来事を覚えていなくても、大人（親）が覚えていて、それを温かく語ってあげることには大きな意味がありますよ。

思い出として覚えているかどうかだけで、幼児期の経験の価値は決まりません。大人（親）がその経験を後から語ってあげることで、子どもは「過去の自分」を知り、「今の自分」と繋げて、やがて「これからの自分」へと見通しを持つようになります。

過去から現在、そして未来へと続く自分自身の理解は、こうした温かな関わりの中で育っていくのです。

子どもにとって大切なのは、「覚えている思い出」だけでなく、大人（親）が覚えていてくれること、語ってくれること、そして「あなたは大切に育ってきたんだよ！」と伝えてあげることです。その積み重ねが、子どもの心を支える大きな力になるのです。

